戦後文学の志（三）

――鮎川信夫『戦中手記』と亀島貞夫「白日の記録」――

栗原　敦

7

詩人鮎川信夫（一九二〇、大正九・八・二三生れ。本名、上村隆一）は傷病兵として内地送還されることとなり、一九四四（昭和一九）年五月十五日、くしくもちょうど一年前に上陸したのと同じ日に、スマトラ島北部のベラワン港から病院船で出港した（『戦中手記』65・11、思潮社刊の記述による。以下、特記以外鮎川の戦中の事項についてはこれによる）。「仏印に於ける内還の患者を収容するために先ずサイゴンへ向」かい、「途中シンガポールに寄りジョホールの病院に十日ほど居て」また「比島マニラ」（到着は五月二十六日）の「ケソン病院」を経て、「雨の基隆港へ二日停泊」して、六月十八日（原崎孝「鮎川信夫年譜」『鮎川信夫著作集』10、76・11、思潮社）大阪港に帰着した。

『白日の記録』の著者亀島貞夫は鮎川より一年の年下だが、五月一日より仙台陸軍予備士官学校で教育を受け、戦地への配属に備えていた（亀島に相当すると見られる歴史的事項は『新編　検証　陸軍学徒兵の資料』２０００・12、学徒兵懇話会刊による。志津と著者亀島の重なりについては後述）。この教育は九月十七日から二十一日までに終了、それぞれ南方軍、中部軍へと転属された。「白日の記録」で主人公志津堯志が「一九四四年九月、僕らは博多港から殆んど最後と思はれる南方派遣の輸送船に便乗した。」と記しているとおり、あたかも、鮎川らの帰還を待って入れ

替わるようにして志津たちの「殆ど最後と思はれる」南方派遣が行われたかのごとくである。鮎川らの乗った帰還船も、病院船とはいえ機雷への接触や誤爆の危険を負っての航海であったし、仙台予備士官学校南方軍転属者を乗せた輸送船第十五多聞丸は、比島転出者八八名が高雄で下り、残る三五九名が一九四五（昭和二十）年一月十四日にツーランで下船、陸路で南方軍下士官候補者隊のあるポートディクソンに向かったあと、一月二十六日サイゴンで沈没している。すでに、日本軍は制空権、制海権を次々と失って、各所で孤立、潰滅、玉砕が続く時期に入っていた。

帰国した鮎川信夫は、大阪陸軍病院に入院、「八月　金沢、敦賀の陸軍病院を経て、福井県三方郡の傷痍軍人療養所に入所」（牟礼慶子『鮎川信夫――路上のたましい』92・10、思潮社）。そこで療養中の翌「一九四五年二月の末頃から三月のはじめにかけて」、鮎川は長い手記を、ほとんど「九時の消灯後、十燭ぐらいの電灯のあかりをたよりに、家へ手紙を書いているようなふりをしてしたためた」。「内容は、前年の外泊期間中に会ったTに宛てた手紙のようなかたちになっており、事実はじめはそのつもりであったが、途中でその頃考えていたことを何でもかたっぱしから書きこみ始めた」のだというが、「けっきょくその頃の私の意識にあったすべてのことについて吐露する結果になった。」「よくもわるくもこの手記は、一九四五年二、三月の時点における私の過去の総決算であったと同時に、その後の方向を決めた一つの出発点となった」（『戦中手記』後記）のである。

日本軍の敗色濃厚な戦地、そしてすでに空襲も始まっている本土を目の当たりにしているとはいえ、敗戦以前のこの段階で、自身の「過去の総決算」として、一つには入営以前、二つには入営以後の体験を検証し、さらにそれらを貫いて、一九四五年二、三月の今、この段階でつかんだものの根本を書き記し得たことは、何ものにもまして貴重なことと評さなければならない。それは、彼が敗戦以前において戦後的であり得たことを事実をもって証していて、特筆すべきことなのである。

入営以前に即しては、「自由主義の形骸の文化と満洲事変以来急速に促進せしめられてきた新らしい軍国主義的環境のうちに最も劇しい精神の生成期をもった。そして一九四〇年以後になって僕等が身を以て学んだところのものは絶望の二字に尽きてゐたのではなかったか。僕らは烈しい現実に対する絶望を、まだ自身の若さからくる多分の未練を苦々しく感じながら軍隊へ入ったのではなからうか。」と概括して、遡っては「一九三七年」の早稲田大学文学部予科在籍中前後からの交友と思想を、「荒地」の理念の結

晶に結びつけている。

入営前の「〈格闘する〉個人的時代は完全に過ぎたかに見え」、それまでの「自分の行き詰まった生活を別方向に展開せしめる」ことになるだろう「期待」を抱かせた「軍隊」が、実態として「人間的な自治の精神といふものは葉にしたくもない、――奇怪な階級的な厚顔な専制的な奴隷的な世界であり、決して開放的な集団生活などといふものではなかった」ことの確認は、具体的な事例に則して示し出されている。中でも、古参の班長に評されていた身上調書を盗み見たとき、「これだけ適確に自分を浮彫にするやうな意地悪な世界」を初めて思い知らされた感を得て、いっそ「この時何かしら勇気の湧きあがるのを覚え、脚がわなわな震へてゐたやうに思ふ」ほどの一種の回心を得て、かえって逃避的ではなく「とにかくこの苦境を切りぬけ、一世紀を横切って、〝荒地〟の歴史をもう一度見なくてはならぬ。現実の生きた模範である歴史の中に自分の顔を見なければならぬ、――といふ執着が猛烈に頭を擡げてきた」経験の記述は印象深い。その上でスマトラ島派遣後の、軍隊的に「かなり優秀な上官に忠実な土偶となり生きつづけた」自身を振り返りつつ、回想が「自分が内地へ還されるやうになった来歴を書く順序まで来た」ところで、次のように記していることは見逃せない。

僕の軍隊生活は僕自身に如何なる影響を与へたかは、いまだあまり明確ではない。明瞭なのは異常な運命的事件である軍隊生活の数々の困苦や圧制によっても、私からどうしても奪ふことが出来ぬもの、私が最も執拗に固執してゐるものは何かといふことである。或は私の軍隊生活の最も重大な意義は、さうした私から引きはなすことの出来ぬ無二のものを自らにはっきり知らしめたといふことに尽きてゐるのかもしれない。

それではその「私から引きはなすことの出来ぬ無二のもの」とは何なのか。しかし、鮎川はこのあとすぐにそれについてとりまとめることをしていない。引き続いて記されたのは「兵士たちとの共同生活によって特に感じた二、三のこと」であって、まずそのひとつは、『古兵某の話』の紹介である。そこでは、古兵がかつてマレー作戦の際に行った、「占領した先々の市で敵産の新品を徴発」する放縦な振る舞いの「愉快」さ、「英人の飛行士」の処刑、「華僑」の「拉致」、「処刑」。また別の「兵士の話」では、「シンガポールへ入ったとき」の「強姦、凌辱」の話の類である。そして、これを踏まえて、鮎川は「戦争の根拠は戦争によって獲得することは出来ない。」といって、戦争の本

質は何かについて考察を深めようとする。また「兵士の側から戦争を見ることの誤謬をはっきりしておきたい。」とも指摘する。戦争の中にあっては、「兵士は戦争の何たるかを解してゐない」、「彼等は単に命を的にして購ったところの危険な肉慾や物品や、強猛な破壊欲を満たすところの敵陣攻撃や、無我夢中の感情的刺戟や興奮、敵に対する理由なき憎悪と戦友に対する熱烈な肉親感、等を絶えず食ひながら生きてゐるだけである。」とまでいい、それ以上の兵士も、それ以下の兵士もいなかったとして、ついには「被占領地下の婦女子を凌辱し、強制徴発を行ふ人間、その同じ人間が、万才を三唱し、みずからの犠牲的精神に満足しつつ戦死することを少しもおそれぬ忠勇なる兵士なのである。死を避けようとすることは死ぬことよりもおそろしい恐怖を伴ふ。これは軍隊教育を受けた日本人でなければ絶対にわからぬところの感情である。」と断言する。

それでは、鮎川自身はどうしてこのことを語ることができるようになったのか。その理由こそ、彼が「たまたま病気に罹って、暫くの環境の安静と休息によって、自己にさまざまな反省を加へることが出来たからである。」と自覚するものであった。

このあと、「手記」は、中隊長伝令であった自分の仕事、マラリヤ三日熱罹患、無理な任務、左胸部への烈しい衝撃、血痰の喀出、シグリの野戦病院入院、友人からの便り、そして表現への還帰、友人森川義信とその遺言、最後の手紙の中の「魔の山」の末尾の一頁を思い起こし、病院船が最初に寄ったサイゴンで見た光景から得た感想をこう記している。

私はその時、我々の鼻面をとって勝手に引き廻し、我々自身を駆って常に政治的な出来事や虚偽の熱情のうちに精力を消耗せしめ、虚名や歴史的必然の名を借りて奉仕や犠牲を強ひる一切のものに反撥を感じた。

この「反撥」を裏付ける主体について、鮎川は「私は〝荒地〟を信ずることによって未来を幾らか信ずることが出来るといふ自己を妙な味はひ方で自覚してはじめて勇気の湧きあがるのを感じた」と説明する。まさに、これこそが「私から引きはなすことの出来ぬ無二のもの」に他ならなかった。それは、『戦中手記』の「後記」で記された、「戦争というもののおびただしい理念化、実際化に抗して全人的な自己をとりもどす」ために必要とされたもの、すなわち「荒地」の理念化なのだった。「戦争というもののおびただしい理念化、実際化」がどれほど圧倒的であったか、そして、その中から「全人的な自己をとりもどす」こ

と（〜その中で、自己を保ち続けること）がどれほど困難であったかに思いをいたすことなしに、受けとめることの許されない内容であった。

手記の初めの部分には、Tとの再会の時に一番語りたいと思っていたこと、「飾りっ気もなければ論理もない純粋の直観から生れたもので、軍隊生活中の苦しい空気とすくない自由のうちに胚胎し、新らしい経験の鞭で絶えず叩かれながらも意識の奥で大事に養ひつづけてきたエゴチシスムが、君の手帳の切れっぱしに書かれた手記の断片を拾ひ読みしてゐるうちに、急に制止することの出来ぬ言葉の叫びとなってあふれてきたもの」と指し示されていたし、「君の手を借りて創り上げられたところの僕の思想」「君の目に見えざる協賛と多くの友人たちによって教えられたもの」という、歴史的で、無名にして共同なるものとしての自覚のもとにおかれたそれなのであった。

『戦中手記』として公刊された際、「後記」の末尾に「あらゆる totalitarianism と戦わなければ、個人の自由はけっして生きることができない。国家や組織を理想化することによって、人がむざむざと死んでゆくのを黙視してはならない。」という言葉が記されることになったのもそれゆえであったろう。

8

鮎川信夫の場合、戦時の繰り上げ卒業により、卒業期が昭和十七年九月となった。卒業論文を書き上げながら、教練の実習時数不足のため彼の卒業は認められなかったが、幹部候補生試験受験の資格はあったようで、『戦中手記』の中に、さほど熱意もなく、すでに落第していたことが記されていて、結局最下級の兵士として戦地に送られた。また『戦中手記』の書きぶりのせいなのかどうか、これを読む限りでは、鮎川自身にゲリラの討伐や戦闘体験はなかったようにも見られる。

比較すれば、見習士官となり、共匪討伐の戦闘体験を持った亀島貞夫との間には違いもあるが、たとえば鮎川が記した「古兵」・「兵隊」の話には亀島が『白日の記録』に書き込んだ題材と重なる事柄も少なくない。鮎川が、敗戦以前の時点で戦争の現実を生身の言葉で語る兵士の話を書き記しておく必要があると考え得たこと自体、鋭い問題意識と卓越した批評的視点の確立があったことを意味している。戦中にあっては当たり前の自慢話、いや経験していない新兵に対して、話して伝えたい特別なことと意識しながら、それらの事実を根源的な反省や批評の俎上に乗せるべ

き視点を持ちようのなかった語り手たちのあり方、そしてその体験を、単なる肯定・同化ではなく、もちろん単なる否定・唾棄でもなく鮎川は記しておこうとした。戦後およそ二十年の時を隔てて、『戦中手記』を公刊することを決めた際、鮎川は「後記」に「今から考えると、もっと戦争期の事実について記録しておくべきだったと思う。そのほうが、なまじっかな感想を述べるよりもよほど役に立ったに違いない。」とも振り返っている。「手記」公刊の意図をさぐる糸口にもなろうことばでもあり、もちろん鮎川の「手記」が「なまじっかな感想」にとどまっているとは決して思わないが、このことばは亀島の小説の試みの意義と、実際の執筆の困難の秘密とを側面から照らしだしてくれるものになっているのではないかと思う。

『白日の記録』の標題には、「記録」という、いわば作り物・虚構・想像性に反する意味が含まれている。同時に、内容に触れればたちどころに分かるように、いわゆる戦記・実録・手記といった筆者の体験記録、告白録の類ではない。紛れもなく《小説》と呼ぶ以外ないものである。あるいは、占領下にあって、戦争犯罪の追及がなされる時代であり、それらを受ける人々への咎となることをあらかじめ避けるための配慮としての虚構の装いもあったかもしれないが、それはこの作品の表現意識の本質とは別の次元のことだろう。

もちろん、『白日の記録』の主人公志津堯志の経歴や体験が、おそらく作者亀島貞夫のそれを踏まえて設定されているであろうことは容易に想像される。作品をより深く理解するためと、微妙なずれを割り出し創作の秘密を浮かび上がらせるために、踏み台にされた客観的事実を分かる限り検証してみよう。

第一作「白日の記録」が「僕」による戦後の現在からの回想にはじまっていることはすでに述べた。「軍隊、一九四三年一二月から、去年六月迄、約二年半」「この三〇ヶ月」が現在と突き合わせられる回想の範囲（過去であり、むしろ回想の現在）である。

時間順に整理すれば、「当時僕達は幹部候補生、陸軍軍曹だつた。」「予備士官学校の課程を漸く半ば了へたところへ、突然転進命令が来た。南方とだけで任地は何処か分からなかつた。」「僕は父と恋人に知らせた。明日発つと云ふ前日、最初で、最後の外出を許された。僕は面会所に集つた人々の間を、血眼で探した。三々伍々と、父や母や兄弟等と連れ立つて外出して行く候補生の間を。然し遂に無駄であつた。」

「係累」との別れは、翌朝のこととして、「起床直前、不寝番に起され、父と恋人に会つた。父はげつそり老ひてゐ

た。恋人は、眠れなかつたのか、頬がむくんで見えた。僕は不思議な程軽快に振舞つた。会ふと、言葉は痕方もなく消えてゐた。唯子供のやうにはしやぎたかつた。子供のやうに清潔に。恋人は時々微かに笑つた。面会は僅々三十分に過ぎなかつた。」とある。さらに駅頭での父親の見送り、構内を進み、ハンカチを眼に当てる（誰かの）「女親」に対比して「恋人は群衆の蔭から瞠いた眼に僕を求めた。強い視線であつた。憤りに燃えた光りを以て。構内へは一人しか入れなかったのだ。」と描かれ、構内に入った父との別れで結ばれている。こうして「乗船地博多へ下る軍用列車が仙台駅頭を離れた瞬間」、「すべての係累の断ち截られた瞬間」をはじめとして、回想の現在は開始された。

「一九四四年九月、僕達は博多港から殆んど最後と思はれる南方派遣の輸送船に便乗した。――第十五多聞丸、七千頓の改造油槽船。」海に出て、「片方のスクリューが壊れ」船団から遅れて進む。「台湾、高雄。敵機動部隊、北上。上陸、舎営。」一週間後、「痛烈な空襲」を受ける。

「一九四五年正月、海南島楡林港外。碇泊は既に一ヶ月に及んだ。」「アメーバ赤痢」の「蔓延」、「虱」の「跳梁」。「敵機来襲」、停泊中の様子。

「二日二夜」後「仏印通倫の港」着。「通倫上陸から、馬来西海岸ポート・ヂクソン教育隊まで、蒸れかへる貨車輸送の旅」。「十頓貨車に一個小隊、三十二名」、「二ヶ月足らず」で到着。

「かうしてポート・ヂクソンの四ヶ月が始まつた。」卒業、「一九四年六月三〇日、馬来方面軍司令官板垣征四郎の査問を受け、刀を腰に、兵科見習士官に任官」「内地出発以来、九ヶ月半。」「僕の任地は歩兵四十六師団だつた。」「僕の行つたのは一四七聯隊の二大隊四中隊だつた。」

以上が、志津堯志が所属の中隊に至る経緯である。これまでの細部こそ、第一編「白日の記録」前半の小説内容だが、いまはひとまず「ポート・ヂクソンの四ヶ月は、それに先立つ輸送の五ヶ月と共に、一日々々が重苦しい時間にとりまかれ、滑り落ちるやうに過ぎ去つて行つた。然しそこには云ひ知れぬ苦痛があつた。正直に言はうなら、その一日々々は魂の生皮をひつ剥がす苦痛であつた。唯僕達の魂自身が惨めなものであつただけに、さう言つてしまふことに何かためらひもするのだが。」とされた約言に従って、歴史的な確認に取りかかろう。「魂の生皮をひつ剥がす苦痛」については、改めて後に取り上げるつもりである。

さて、『白日の記録』ではいわゆる「学徒出陣」に関連づけられたことばは全く見られないが、志津堯志の経歴は、年代的に見て、いわゆる「学徒出陣」の該当者のそれであり、著者亀島貞夫のそれに相当するものと思われる。

昭和十八年十月の学生・生徒に対する徴兵猶予の停止によるいわゆる「学徒出陣」が最も世の注目を浴びることになったが、これも、戦時体制下における文教および徴兵政策の一つの段階にほかならない。『新編　検証　陸軍学徒兵の資料』には、学徒兵といわゆる「学徒出陣」（昭和十八年十月）とそれに関わる歴史資料がさまざまに集められているが、それによれば、明治憲法体制下の兵役法にも徴集の延期の定めがある。いうまでもなく、「学徒」とは、大学学部等の「学生」と中学校等の「生徒」を指すものである。昭和二年の兵役法施行令第百条、第百一条の定めるところによって、中学校等、師範学校・高等学校高等科・大学予科等、大学学部等のそれぞれに従って、在学中の徴集延期が記されている。これに対して、米英との関係の緊張が高まる頃、昭和十六年十月以降、段階を追って「在学徴集延期期間ノ短縮」がはかられていった。徴兵延期猶予期間の短縮は、昭和十六年十月に兵役法中改正により徴集延期期限が高等学校高等科・大学予科は二十二歳、専門学校は二十三歳・大学学部（医学部を除く）は二十四歳に短縮。その後も調整が重ねられ、昭和十六年十月、十一月には相次いで卒業年限の短縮があり、「昭和十八年三月予定の卒業は半年繰り上げて、昭和十七年九月」になった。鮎川信夫はこれに該当した。さらに、「昭和十八年九月に繰上卒業する学生は臨時徴兵検査でなく一般の徴兵検査を六月に受けることになった。」　戦局が窮迫してきた昭和十八年九月二十一日、東条首相の演説の中で「学徒の徴兵猶予の停止」が発表された。「九月末には全国の大学、高等専門学校が卒業生を送り出し、その大半は十月、十一月には軍隊に入った」。「昭和十八年臨時徴兵検査規則」に従って徴兵検査が行われたが、これに伴う「幹部候補生志願関係書類の提出を定める陸軍省令」（十月十五日）によって、「幹部候補生志願関係書類は」「十二月一日の入営または応召の際に携行して部隊長に提出することになった。」「文科系学徒で徴兵猶予中の者全員（大学学部生なら大正九年四月二日以降大正十二年十二月一日生まれまで）がこの徴兵検査を受けた。」大正十年生まれの亀島貞夫はここに該当した。

仙台陸軍予備士官学校は「昭和十八年九月一日、仙台陸軍教導学校（昭和二年開校）」が改称されたもので、要点のみ摘記すれば、「4、教育期間　自　昭和十九年五月一日　至　昭和十九年九月十七日～二十一日」「5、転出状況　南方軍教育隊　四四七名（内、比島八八名）中部教育隊　二六二名　特殊機関　二三名」「6、配属後終戦迄南方軍配属者は昭和十九年十二月四日八八名が比島に転出（内戦死者七六名）。その他は昭和二十年六月三十日卒業、

マレー、仏印等各地に配属。中部軍は昭和十九年十二月二十五日卒業、本土、沖縄、中支、満州等に配属。」

ポートディクソン教育隊（南方軍下士官候補者隊）組は、仙台よりの「到着　昭和二〇・二・二八、卒業　二〇・六・三〇」。

乗船別転属記録には、「③第十五多聞丸（六、九二五屯）」として「19・9・29（三池）〈モタ二七船団〉……→20・1・14［ツーラン着］（以下陸路）……→20・2・28（PD着）　20・6・30（PD卒業）」と記載されている。

ポートディクソン教育隊は、「前橋、豊橋第一、仙台、熊本の四予備士第十一期甲種幹部候補生約一五〇〇名」を対象とし、「英軍から接収した」「営舎を利用」した。教育内容は「一般術科、学科、徳操につき内地での教育を補完したほか、「操典通りでない、時機に応じた応用戦闘」教育を目指し、一般歩兵は対戦車、水際上陸、ジャングル戦闘、重機は湿地通過や背負子による射撃。砲兵は臂力搬送や対戦車射撃など何れも専ら実戦向訓練、戦訓を生かした」ものであった。

仙台駅頭での「係累」との別れ以降の志津堯志の経歴は、仙台予備士官学校でこのとき教育を受けた予備士官にぴったり重なっている。客観的歴史上の事実は、おそらくそのほとんどを亀島貞夫のそれに負っているといって差し支えないであろう。なお、志津の「係累」とされるものが父と恋人であって、母親の姿がないことも、亀島が少年時に母を亡くしている（島田高志作成「亀島貞夫略年譜」による）ことと符合する。それでは、志津は私小説としての作者亀島に他ならないのだろうか。この件についても、ひとまずはそのレベルでの同一ではないとだけ言っておく。

ポートディクソンの教育隊の課程を卒業して、志津は「歩兵四十六師団」「一四七聯隊の二大隊四中隊」に配属された。この師団、聯隊については、新人物往来社戦史室編『日本陸軍歩兵連隊』（91年8月、新人物往来社）によれば、「歩兵第百四十七連隊」として「編成地　都城、編成時期　昭13・5・23　当初は第百六師団に属し、中国戦線へ。一たん帰還。昭和十八年十一月再び動員され、第四十六師団に属し、インドネシアに向かった。十九年二月スラバヤ到着後まもなく空襲をうける。十九年三月から約一年間スンバワ島の陣地に拠り防備をかためていたが、二十年四月、シンガポールに移り、米軍上陸に備えて陣地を構築中に終戦を迎えた。」とある。大筋は妥当な記述なのかもしれないのだが、大まかにすぎて『白日の記録』とは必ずしも重ならないところが感じられ、究明すべき点が残っている。いくつかの戦記、師団史等によると、歩兵一四七聯隊については熊本の兵団の戦史、福岡、大分のものなどに記載が

見つけられたが、まだ十分な確認ができないでいる。大河原宏二氏の教示によれば、亀島の所属した「部隊は宮崎と大分の両県の将兵からなる部隊」だったという。編成地が都城であり、それは確かなことと思われる。

（続く）

（くりはら　あつし・実践女子大学教授）